

(IV-54)

海から望むアプローチ景観の考察

— 広島県福山市鞆ノ浦の港を事例として —

An Approach Landscape from the Sea

— The Case Study of Tomonoura in Fukuyamacity Hiroshima Pref. —

日本大学理工学部交通土木工学科

○学生会員 玉井 裕

日本大学理工学部社会交通工学科

正会員 伊東 孝

1. 研究の目的

瀬戸内海を通る航路を結ぶ重要な港である広島県福山市の鞆ノ浦は、古くから「潮待ちの港」として栄え、朝鮮通信使を迎え入れた。鞆港の景観構造は、稀

有なことに当時と基本的に変わっていない。そこで本研究では、朝鮮通信使が望んでいた鞆ノ浦港の景観を事例に、海からのアプローチ景観を距離域で分類することを試みた。

2. 調査概要

2-1 調査方法

視対象から距離ごとに、0～1000mまでは100mピッチ、1000m～は500mピッチを基本として写真撮影した。次に視距離ごとに景観対象から受ける見え方・感じ方の変化をまとめ(表-1)、これをもとに樋口忠彦氏の景観の距離域分類を参考に、海からのアプローチ景観を分析した。

2-2 撮影方法

鞆ノ浦の医王寺付近の樹木・構造物(ホテル)を視対象として、距離別に撮影した。視対象別の比較対象としては構造物を冬に撮影した。樹木については季節的な比較をするために、夏冬の両方で調査をおこなった。撮影日時および天候は以下の通り。

夏調査 2001年8月8日(水) 16:00～17:00 曇り

冬調査 2001年12月2日(日) 12:00～13:00 晴れ

表-1 視距離ごとの視対象(構造物)の変化(冬)

No.	視距離(m)	見え方、感じ方(視対象 構造物)
1	100	構造物の細部(屋上のアンテナなど)まではっきりと認識できる。
2	200	窓の状態(カーテンの開閉)まではっきりと認識できる。
3	300	構造物全体の色彩が淡く認識されるようになる。
4	400	窓の状態(カーテンの開閉)まではっきりと認識できる限界。
5	500	壁面のわずかな屈折が認識できなくなり垂直な二面にしか認識できない。
6	600	距離が離れるにつれて徐々に小さく映るほか特に見え方に変化は見られない。
7	700	徐々に構造物の壁面の凹凸が認識できなくなる。
8	800	更に構造物の壁面の凹凸が認識できなくなる。
9	900	更に構造物の壁面の凹凸が認識できなくなる。
10	1000	窓や壁面の凹凸などの存在が認識できる限界。
11	1100	構造物の輪郭に位置する細部が認識できる限界。
12	1200	建物に移る陰影を認識できなくなり、平面的な印象を受けるようになる。
13	1500	視対象が建物であると認識できる限界。
14	2000	輪郭が認識できる限界。
15～25	2500～7500	徐々に小さく映る以外に変化を認識できない。

3. 視距離による分類の定義

本稿では景観の距離と景観対象の分析に、樋口忠彦氏(『景観の構造』)の分類を適用した。

3-1 三域の分類

風景をとらえるための伝統的な近景・中景・遠景という分類は、多分に構成的・構図的といわれる。そのため樋口氏は純粋な距離的概念として、近距離域・中距離域・遠距離域の概念を用いている。

3-2 基準対象の設定

わが国における生態学的クライマックス(極相)の植生は森林であることから、ランドスケープにおける距離を分類する基準対象として、「樹木」を設定する。

(1)近距離景 一本一本の樹木の葉・幹・枝ぶりなどが、視覚的に意味をもつ領域。自然としての樹木を感じることができ、それと一体感のもてる親密な領域である。

(2)中距離景 一本一本の樹木のアウトラインすなわち樹冠は看取できるが、近距離景で見られた一本一本の樹木のディテールはもはやとらえることができない。視覚以外の感覚は意味をもたなくなり、感じ取るとうよりは、明らかに「見る」という感覚になる。

キーワード：鞆ノ浦、アプローチ景観、海からの景観、三域分類

連絡先：〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1 日本大学理工学部社会交通工学科 都市環境計画研究

(3)遠距離景 稜線などの地形のアウトラインや空を背景としたスカイラインが、際立った視覚対象になる程度で、三次元的な奥行を実感することはできない。

4. 考察と分析

4-1 結果

表-2は今回の調査で得られたデータであり、図-1、2はこれを図化した。以下、これらの結果をもとに樋口氏の説と得られたデータを比較、最後に今回の調査で得られたデータ同士で夏の樹木と冬の樹木を比較し考察を加える。

表-2 各距離域の分岐範囲

	近・中距離域の分岐範囲	中・遠距離域の分岐範囲
冬の樹木	450~550	2750~3250
夏の樹木	450~550	1750~2250
樋口説	340~460	2100~2800
構造物	350~450	1250~1750

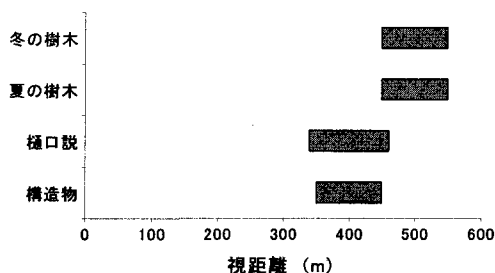


図-1 近・中距離域の分岐範囲

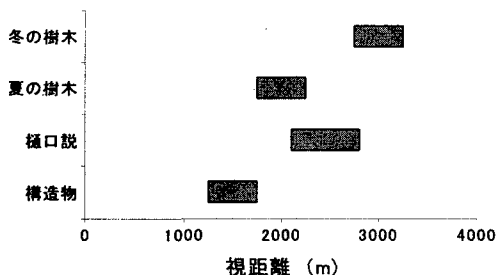


図-2 中・遠距離域の分岐範囲

4-2 構造物と樋口説の比較

構造物と樋口説を比較すると、近距離域と中距離域の分岐範囲の値はほぼ同じだが、中距離域と遠距離域の分岐範囲では構造物の平均視距離の方が短い。これは視対象の大きさは、樹木より構造物のほうがかなり大きい、構造物は集合でないため視距離が長くなると特徴をとらえにくいことが理由としてあげられる。

4-3 夏の樹木と樋口説の比較

近距離域と中距離域の分岐範囲では樋口説より夏の樹木が大きく設定されたが、中距離域と遠距離域の分

岐範囲では、小さく設定された。これは夏であるために空気中に含まれる水分が多く、空気の混濁度が高いことが影響したものと考えられる。そのため視距離が大きくなるほど、その現象が強く認識されたと考える。また 15:00 からおこなった調査であり、曇りであることに加えて日が落ち始めている影響も大きいと考える。

4-4 冬の樹木と樋口説の比較

ここでは、近距離域と中距離域の分岐範囲、中距離域と遠距離域の分岐範囲の両方とも樋口説より大きく、調査前に予想した結果が表れた。この要因としては、最も日の高い 12:00 から調査をおこなえたこと、当日の天候に恵まれたことなどの好条件がそろったこともあげられる。しかし一番大きな要因としては海からの景観の最たる特徴である、視対象と観測点の間に視界を遮るものが空気の混濁以外まったくなく、見通しが陸地よりはるかに利くことが影響した結果だと考える。

4-5 樹木の季節による比較

近距離域と中距離域の分岐範囲では同じ値となり、中距離域と遠距離域の分岐範囲では冬の調査の方がかなり大きくなった。前述の調査当日の天候条件による違いもあると思われるが、やはり空気の混濁度の影響が最も大きな要因だといえる。夏調査では 5km 地点ですっかり煙り、稜線が認識されるのみであったのに対し、冬調査では夏調査の 5km 地点と同程度の景観になる地点を求めて 7.5km まで調査範囲を延長したが得られないほどであった。

5. おわりに

今回の調査では夏冬それぞれ調査日が一日づつであったことから、季節要因に加えて天候の違いおよび時間の違いが大きく影響したと考えられる。

今後の課題としては、調査日に余裕をもたせ天候・季節など条件の違うデータ量を増やし分析すること、写真撮影のピッチを下げより細かく視距離によって生じる変化をとらえること、分析する人数を増やし、見え方・感じ方の個人差をなくすことなどがあげられる。海からながめる景観の場合、稜線をまったく認識できなくなる距離域などがある。そこで海からの景観分類は、従来の三域分類に加えて「超遠距離域」など新たな距離域概念を設けて分類項目を豊かにする必要があると考える。

本研究は、地元の松居敏雄氏の協力を得るとともに、H13 年度日本財団の助成金を受けた。